

こ　　才　　ヤ　　の　　光　　歸　去　來　の　卷

光　　明

斯一縷の光明われらが無始の無明を破す。われらが甚深の罪惡を除く。われらを極樂にみちびくこのひかりによりて更生していける觀世音となり、また大せいしとなる。斯の光の外に佛法あることなし。この光を外にしてげだつあることなし。しやかむにこの光を示さんが爲に世に出たまふ。法藏ぼさつこのひかりを世にあらはさんが爲に五劫に思をこらせり。此のひかり即ちなむあみだ佛なり。この光りによらざれば畢竟して三惡道免るることなし。ア、佛子この光をみとめずして可ならんや。この光われらが眠をさます。この光我に行べきみちを照す。斯光自己を返照せしむ。斯光我と人との融和をなさしむ。斯光しやばを變じて極樂となす。斯光凡夫を轉じて聖となさしむ。斯光鬼を化してほとけとす。斯光十方三世の諸佛を作る。

名號の義解

名詞の解釋　法體義解

名號南無阿彌陀佛、南無は宗教的關係の衆生より佛に對する信仰心、あみだ佛とはこの關係の佛より衆生に對する恩寵を表象す。佛の恩寵と衆生の信仰とに因縁の宗教的關係を結合す。衆生の信仰なきときは佛の恩寵に致一するなく、佛の恩寵なきときは、信仰にしてこの關係をなすに縁なし。

なむあみだ佛とは宗教的關係を名を以て表示する義なり。通じて南無のみを解釋し次に別して彌陀の願意に準じて南無の義を解釋せん。

南無とは梵語にして華には歸命と譯す。この命を以て佛に投歸する義なり。いまは釋す、命とは衆生の天然的精神生活なり。是從來の受想行識の相續なり。この精神生活を投歸して佛の恩寵に即ち全體全幅を佛の恩寵に投歸す。此より人は從來の五蘊相續即ち精神生活に命を捨てて阿彌陀の新生命に入るべし。

この状態を歸命と爲す。命といふもこの肉の色蘊相續を歸すると言ふにあらず。精神的生活を命と云ふ。精神生活を佛に投歸して彌陀の新生命に入しめて南無の義を表す。人天然の精神生活、動物的機能は主我主義にして確然たる目的なし。(以下斷絶)

○

佛阿難に告げたまはく無量壽佛の威神光明は最尊第一にして

嘆徳文要解此大要次に三とす

初に無量壽佛威神光——

關　　係

宗教客體佛の衆生に對する攝化

佛佛の人觸　二恩寵と信仰との合

神佛の恩寵とは無量壽佛因縁花果

彌陀の恩寵を縁とし衆生の信仰を因とし因縁合報する(以下斷絶)

遠大なる望

理想のぼさつとして生活せるもの、遠大なるのぞみなしに目をくらすべからず。望

みなしにあるものは已に心盡死したるものなり。いか成る望かこれなる。聖國の世つぎたらんことなり。聖國の世つぎとならんにはその資格を備へざる可からず。資格とは何ぞや。聖旨の如くにきよからしむるなり。ミオヤにあらせ玉ふ聖徳を興へらるるために望ををこすなり。すべての真理をさとらんとす。心靈をみがくなり。四面玲瓏とかややくようは心情を如來と融合するなり。またこの神聖なるみむねをあらはすよ
うにはたらくなり。正義のみむねをあらはすよふにはたらくなり。世つぎといふことを忘れざるなり。無上の欲望を以て安んぜざるなり。足れりとせざるなり。一日もむだに日をくらさざるなり。一寸の光陰を千金よりをしむなり。むだ話をして時間を費すことをせぬなり。

欲望なき人は貴重なる時間を浪費するなり。一日は極樂の百歳なることを思はざるなり。

欲望なき人は如來が常に與へつゝある無價の寶珠をうけざるなり。

この欲望はいけるくわん世音なり。しやかむにたり。

所念の佛の聖き靈が能念の心に薰染す

楞嚴經の會坐にもろくの菩薩百千の大衆にたいして如來の仰せ玉ふには、ヤもろくのひとたちよ汝等は已に佛法のなかに於て奥室に入りていまは遺る處なきまでに至れり。それにつきておのの銘々に初めて信仰を起したる動機とまたいか成因縁によりて信心開發いたし、無生忍をいたせし、言を換へていは心の更生なせしか、それをよく物がたりをせよ。しからばのちの修行者のために大に信心をすゝめ修行する助成となり、また參考に成るであらうものよとの聖旨を被りて、みなく世こみまつりてまづ第一番に釋尊最初の御化度を蒙りたる處のアニヤキャウヂンニョがすゝみいでて自身のさとりをえたる時の因縁を具さに申のべられにき。つきくながしのかたと次第に我發心せし動機とさとしさまをかたりけるに、發心緣無量とやら、さまざまの因縁によりて佛種を萌すなかだちとは成りしなれ。さて第二十四番目に大衆のなかりすゝみ出でたまひしところのひとりの賢者、いとうるはしさその貌姿、

翠の髪は自ら肉髻に結び、青蓮の眸織月の眉四八の月の西丹果の唇を動かして欣笑をおこせば、光顔ひかりを添ふ。かりうびんがの聲を發すれば、衆人愛敬せざるなし、この賢者こそはせいしほさつと名のらせ玉ひける。聖者彈咳してのたまひけるは、それがしこと發心しふかく信心をえまた無生忍をさとりし時の因縁をいまつぶさに申上げませうならば、そもそも過去無量劫のそのかみ、無量光如來と申し奉つる佛、世に出ましぬ。つゞきて合せて十二の如來世に出興し玉ひ、末の超日月光佛ふかき御めぐみによりそれがしにいと聖き御法りを教へ玉ひき。すなはち念佛三昧とぞ名づけられたり。そはいかにその三昧を修するぞとならば、たとへばここにいとなさけふかき母にひとりの子ありけるに、子はふと家を出で母のもとを迷ひ出でてより、つひに久しく他國にありていたく困乏し苦を受ることかぎりなし。あまりの身のくるしきに、むかし母のもとにありて朝な夕なになてはぐくまれしことなど思ひ出でてより、しきりに母にあはまほしく、あくがるることかぎりなく、寐てもさめても忘るる間もなくぞありけるに、また母のかたにてもわかれにし子のいかにぶびんやとかなじみのきはみなく、子をわするるひまもなかりしに、子は母をおもひ母は子を思ひ、母と子の相互に憶ひ念ふ念力は、たとひ身は千さとの雲をへだてたればとて心は喜しもへだてたりれば、子があくがるるおもひのうちに母の面かけは宛然として眼の前に彷彿したりしそれと同じく、如來はまことのみおやにたまはまれば衆生は子なり。子は一たび木覺真如のみをやのものとまよひ出で、久しく六道のちまたにた、すみ、まことのみをやましませりともえもおもはず、久しくさまよひけるに、あまり世のはかなさに一たび御のりを聞侍りてより、はじめて如來はまことのみをやなることをしりてより、いまはみをやをたかきみそらのあまたにあくがれたなはつたなき煩惱のあかにけがれ見るだにあさましき身とはなれども、さすがはをや子のしたしみはわが身のほどをわすれ、みをやをしたふことはかぎりなく、寐てもさめても憶ひ念ふことの斷ゆる間もなかりしに、

如來はことに大慈悲にてましませば、つねに衆生を愛念し玉ふことしばしといたまはましまさぬにぞ、あくがるる子の憶念のなかに如來は宛ながら聖き靈なるみすがた

は心眼の前にあらはれ玉ふ。いかにありがたきぞやこれを念佛三昧とはなづく。

但し衆生行住坐臥につねに、如來を憶念ふこと子の母をおもふ如くにてあれば現在當來遠からず佛を拜見し奉る餘の方便をからずしてたゞ寐てもさめても如來を憶念し奉つるばかりぞ。これを香光嚴と名づくなり。それがしは此念佛三昧の法によりて無生忍を得候へばしかしてよりこのかたあまりかたじけなく候へばすべての人に教ゆるに此念佛三昧をもて示すなり。

これぞそれがしが信心獲得したる因縁に候ぞ。念佛三昧によりて自ら衆生の心も佛心と成ることは、譬へばいとかがりたかき香物を器にいれ置く時はその器もそれに薫染していつしか同じかほりと成るごとく、衆生佛を念ずれば所念の佛の聖き靈が能念の心に薫染して凡心白から聖心と成るなり。これを香嚴淨と名づく。方便をからずして成佛するところの法にぞありけると。

我本因地、以念佛心。入無生忍。今於此界。攝念佛人。歸於淨土。

これなんそれがしが深く佛門に入り無生忍をえたる因縁に候ぞと、八音響をながしてのべ玉へば、百千の大會は信心肝に銘じて念佛三昧に意をかたづけ、しやかむには善哉々と讃嘆し玉ひさ。

さればには過去久遠劫むかしより念佛三昧をもて自利々他の因縁ふかければ我國に降誕し聖源空大師と化を垂れ玉ふにも念佛三昧をもてろ／＼の衆生を攝し玉ふ。

衆生佛を念ずれば、佛心白から凡心に熏じ

香香器に感染する念佛三昧の法と、大師の、

あみだ佛にそむることの色に出では

秋のこずゑのたぐひならまし

の御詠のこゝろを思ひ合せてげにふしぎにたよとかりける。されば四智圓明の月は第一義諦の空に輝き………迹を垂れては宗祖の遺風を仰ぎ、本地のむかしを仰では法王の智慧門を掌り玉ふ孰も念佛三昧をもて寐寐に佛を憶念して自己の胸を慮にして

秋のこずゑのたぐひならまし

との宗祖大師の御むねにならひ玉へかし。

佛性の田地を荒す惡魔

日かげのこまのあしなみはやく、もはやことしも秋の半は過にけらし。物さびしき秋風に感じて、佐屋の里にいませる吾同胞のことを今更にもはれて候まゝ久しく御無音せしことをも御わびがてら申進候。名古屋より立んとする頃に歸運法尼西逝のことを承はりてこと定まりぬれば止なく五重傳法の爲に東に歸り再び西にゆく折をと思ひ居りしに計らず五月中旬に信州善光寺もうでがてらに長野傳道と云ことに相成候。同地は十七年むかし傳道せし因縁もあれ廿二月ほど長野縣内にて宣教し引つゞきて上州にて歸り途の傳道是また十七年ぶりにて同縣にも粗二月ばかり止まりて宣教いたしし内に各地の大洪水、折しも關東大洪水の水源地なる、上野國利根郡即ち利根川の水源地に在りて傳道に従事したりし、上州十一郡は悉く大出水、幸に私どもの在地なる利根郡のみが全く無事といふので身には事なく、傳道につくし居たりしが、途中の橋梁陥落通行止絶との事、道の開けるをまちて再び上州高崎市に歸りまた同市にて傳道然るに埼玉縣の教會の地方の大水害を被りしことなれば見舞がてら歸りしに、實に武藏の國北葛飾郡は目もあてられぬ次第にて候。

實に此の悲惨の光景を目撃して深く感じたりしは、天地にみおやの御めぐみは充滿るはづなるに、此世界凭る恐ろしき惡魔が伏在して而して吾同胞をかくまでに慘狀を呈せしむるとは實に憎むべき惡魔かな、それをおもふにつけても私どもの胸も、

大みおやの御恵に充さることなれば、何日でも平和と歡喜とに充さるべき筈なるに、折々貪瞋の惡魔が潜在せしが現れ出て佛性の田地を荒し安心の宅を流失せしむるなどとはもはや慎しみて再び發さゝらむことをと存候。被害地の見舞終るやまた今回は茨城縣常陸の國へ傳道にまかり出で候。此土地はむかし淨土宗の中興と仰ぐ了聖聖開禪師の出土ひし國にして淨土の今日盛隆を見るは全く國師の力なり。また親鸞上人が始て念佛他力の宗旨を開きたるも同じく此地にて候。

昨日は夕まぐれ降る雨につくりし罪も沐かれて十町計りのぼり、眞言宗に有名なる雨引山てよにのぼり、莊嚴美をつくしたる大悲閣の筵にありて大悲の尊像を拜し奉り

て、觀世音は吾等が大みちやの長子にましますば、即ち我等適御見君なれば、懐しくも存じ候。且つまた此國の人々即ち同胞等は

大みちやの御名だに知らて關路にさまよひしもののみ多ければ、願くば御見さまの御慈しみを以て吾同胞に

大みちやの光明に觸れて良く御子たる本分をつくし、

大みちやの永遠かぎりなき光の御國に入る丈の資格をそなふべき同胞を御引合せ玉へと祈念し奉り候。山靜なる精舎に夜を明しぬ。疊石數十尺の高き樓上に在りて、眞向ふに聳ゆる峯は筑波山てふ己が廿歳ばかりの時に禪那三昧に入て修行せし山なればむかしを忍びて懐しく感じ候。當國は我生國の隣國なれ共始めて今回博道に罷出候願くば國の人々に、

大みちやの御惠のほどをしらせまほしく候。是より十一月中旬までは常陸と下野にて博道のつもりにて候。

懐かしき佐屋のそなたにあくがれて、

大みちやの御名をととなえて吾同胞のために光榮あらんことを祈る。何れことしのうちにはまたまかり出候て、御目にかゝることの出來うるやうに、

大みちやにねぎまつりて候。

向中のべたき事山々候へども後のたよりにまで遣し置候。

ふるさとのきよき御國は彼方ぞと

時しもさつきのなかばなれば、ある師の坊にさそはれて菖蒲園に遊覽しければ、あやにうるはしくあやめは咲けらし。花を見るにつきてたゞちに聯想しけるは、かのなつかしき園生に生じける、……………心霊の花はいかにともはやこの頃は、うるはしきをさそひ、覆はしきをあらそふて咲けるは定まれることは、よろこばしき胸の中より己にせめて、波動はたちたりき。

そは外ならずあづかりにし園丁かいたりて未熟にてかつ懶うく、もしもやあたら花園を、下手な園丁の爲にしぞこなひはせぬかと、若しも咲くべき時に咲もせぬとせば、

園丁はむかしならば切腹今日にいはゞ罰金とでも申しませうか、願くば園丁をあはれみ、

如來のみまへに面目をあらしむるやうにあゝ花よ花よとさげけしかば忽ちに心の天は晴れわたりし。いとすゞやかなる聲がきこえける。

「はなはうるはしく、みめぐみのつゆをえて、きよすがたはみむねの如に、そのかばしきにみさかえをあらはし、たえなるいろは世にあるべくもあらじ。きよきみくにはここにきたりにき。無爲のみやこはよそならず、ころの花のひらくところ、いけるぼさつのまします所かゝる妙なる聲の聞きしより最早や、同じくみほとけのみはたらきとはせしなから、あだなる花を見るべくともおもほえず、はるかにそれのかたなる、みそらをながむれば、荒井やまのかねの音はきこえぬ。ころつきて見れば夕日かげいと、うるはしく、ふるさとのきよきみくにを彼方ぞと、御名によりてきよき友の、さちをいのりつゝかへりぬ。

使ひくだされしこと辱く

ミオヤなる如來の大なる御めぐみに感謝したてまつる。無礙光裡に、うるはしき御ころの、生活をもつて、たふとき御名によりて、みさかえをあらはし、いとも幸なる御院内の多祥を賞したてまつる。

そのうち御無音のだん、ざんぎざんげの外なく候。袈裟このほどまで、千葉埼玉地方を経めぐりて目をくらし候。それでもたふとき御じひのふかき、ミオヤはかゝるなまけものをあはれに思召し玉ひてや一日もたふし玉はずして御つかひ下されしことをおもふと、たゞ／＼かたじけなふ、たふとき御名をとなへて、感謝のほかこれなくと存じ候。來月はみなさまに久しぶりにて御めにかかることを得させ玉ふことならむと切に、如來さまに念じ上て居ります。

山々申上たく候へども御面語を期してよろづ申上候。

心は大ミオヤの光明の中に

一六

大ミオヤの光明裡に御院内各御精進に御つとめ爲され候事有難き事に候。

良に惟れば世の中は夢幻の須臾の程有や無やの萬のさま生者必滅は娑婆の習、會者定離は人界の掟、何人も免かれぬ事ながら、嚮きに辨周法尼の西遊あり、また御院主智隨法尼の御遷化あり。我ら及び皆の爲にも世は無常なり須臾も油斷してはならぬ。専らに各自に與えられたる生命の時間を、大ミオヤの光明のなかに畢意にかなふつとめを爲して空しく送り徒らに暮してはならぬと云ふことを自覺させん爲に教訓なされしものと信ずる時は實に御兩尼の皆様に対する御説法は實に深刻なる感が有らんと存候。願くば早く身はここにあり乍ら、心は大ミオヤの光明のなかに意義ある價值ある生活に入るべき様に御心がけなされる事を望ましく候。

ミオヤをよそにして世界に何ものか頼るべき

拜啓殘暑尚酷敷候處、御院主様始めとし、御院内皆様同じくミオヤの御めぐみの裡に魔事なく御日ぐらしのほど辛の至りと遙に賀し奉り候。愚僧事も、

ミオヤのよがき御めぐみにより、怠りながら日も日々御奉公申上ることの能きるのば是全く御恩寵のしからしむることなれば、感謝しつゝ日をくらし居り候得ば願くば御慈慮を休めたまはらんことを。

過日御書翰にあづかり辱く拜見仕候。今回真如寺の方へは御弟子さん衆が御都合あしくして御出でてに成り兼候やうマ、ならぬ娑婆の習ひなればこれ止むを得ざることに候。亦承り候へば加藤一正殿兼て御病氣につき御療養の處終に二十三日御命終に相成との御訃音に接しつゝ感じ候。實に老少不定の習ひとは申しながら、二十四歳を一期として遠く不歸の旅となりしとは眼前の無常に閻浮の露命のいかに果敢なきものぞと思へば、如かじかの法性常樂のみやここに到りて金剛不壞の身を獲んにはと。併し乍ら氏は豫て安心決定して、ミオヤを憧憬しつゝ神を入れる日のかたにそゝぎて慈親のみもとに歸せんことを期せるとせば、必らず氏は二十三日午前二時に低頭合掌して高聲

一七

に念佛し、ミオヤの御影と數珠とをもちてありしほどは此國に在し、かども、愚頭已入齋院界、この世界の未だ三時にはならじ一刹那の間には、もはや頭を擧げて拜み奉れば、五百色の光に照らされ水鳥樹林の妙なる響に無始曠劫來の無明の夢さめて、不覺に轉じて眞如門にさとり入らん事。氏は悼を穢土の遺族のかたに遺しあき、自己は神を淨き御くに樂しき御園にうつりて寶の池に浴しては多劫の心魂に染みたる垢汚を洗濯し、いまはいかに清く潔よきすがたとは成りしやらんと思はれて候。

氏はあなた方や私共に此身のげに頼みがたきこと斯の如くにてあるとたしかに示したては有ませんか。大なるめぐみのミオヤをよそにして世界に何物かたよるべきものやあると致へたではないか。私共は今夜にも殺鬼が攻め來ることはないと保すことが出來ぬ身をもて、いかで安心ができません。もはやたしかに如來の大なる御めぐみの中に安立して居りませうか。たとひ有餘の身は有りながらも、こころは淨き御くにのすまひとなりて居りませうか。

いけば念佛の功つもあり、死なば淨土にまいりなん、兎ても角ても此身には、思ひわすらふことぞなき。

と宗祖大師が吟せられませしが如くに、安心が確立して居ませうか。御慈悲のミオヤは決定して子をすてたまふ思し召は毫しもましまさぬなれども、子はいかにして親をわすれがちになるのでありませう。わたくしは故一正君に對して肉に對するの悼みと靈によるの喜びとが交に感じられます。

一日も早く親子の名乗合ひ出来るやうに

生者必滅會者定離は有爲の世の道れ難き掟とは兼て聞くものの御住持智隨法尼様には先月廿日憂き世の娑婆を辭して、大みおやの在ます西の彼國に逝かせ玉ふたとの事、今更の感にうたれ候。先に辨周法尼已に去りまた御住持様の御遷化實にまぼろしの世をつきてねがふてもねがふべきは大みおやの聖意にしたがふ法にて候。

假令身は娑婆に在り乍ら神は大みおやの慈悲の光明の中に生活する身に一日もはやく成らまほしく候。

一八

鶏の卵は殻の中に在るうちに已に眼鼻かたちづくり候故に殻より抜出しても飛出す身に相成申候

我等此肉體に在るうちに佛性の卵がかたちづくり候て、みおやを眞實にしたふ身に成り候へばこそ、臨終に此殻より抜出して神通自在の身にも成り得るものにて候。されば一日も早く慈悲の懷にあたゝめられて信心の開くやうにならまほしく候。

今度世の人々が折角に人の身を受ながら、

大みおやを知らで聞きよりくらきにまよふ身をいかにも思へば同情に耐えず。自からみおやの光明の中に生れさせていたゞきしことのうれしさ、此御恩を報せんが爲にまた大みおやを信じて見れば、すべての世の人々は皆同胞にて候。其同胞衆をしてはやくみおやの光明中に入らしめ度一心よりして、みおやの光なる小冊子を發行して毎月有縁の同胞衆に分たんと欲す。實に自から大みおやの光明中にくらさる身と成りし上からは、實に世の同胞衆にみおやを知らせ、慈悲の乳房を含ませ一日もはやく親子の名乗り合ひ出來うるやうにしてあげ度存候。七部御送附候間有縁のかたぐゝに御分け下されて而して毎月御望の方には御送附候間本社の方に御通知下され度候。成べく多くの人々に御知らせを願ひ下され度候。御弔辭旁々如斯に御廣候 草々

感謝

如來のあたへたまへる明けきひかりと清き空氣とあたらしきかてとによりて一日のつとめを果したる恩徳を感謝したてまつる。今日のいのちは全くあなたの賜なればこそろをつくしてみむねに仕へまつらむことをちかひ奉つる。

すゞしき御めぐみの中

この頃のあつさよりは煩惱のほむらはなはだし。たきつせのすゞしきよりは如來の御めぐみに浴するころはすゞしかるべし。つねにこのすゞしき御めぐみのなかに安住して、にぎり世のなやみをやすめたまへよ。

聖きみむねのたきつせにころの垢をそゞぎ、きよくいさぎよく日々にあたらにし

て、またあらたならんよう、いのりたまへよ。

ア、きよくいさぎよし、みめぐみにそゞがれしころは。あなうるはしころよし、みむねにきよめられし身は。

無聲の聲

拜啓ようやく開晴の天氣に相成候。めぐみの雨にうるはふて草木のますくさかゆるごとくに、みめぐみにより心霊のさかふることをなんいのり候。

天ものいはざるも四時行はれ萬物成るの理り、

如來様は無聲の聲をもてすべてのものに、神聖と息體をもて警告し愛護したまふことを記し玉へ。

大正十二年九月二十日印刷
全 二十五日發行

誌代隔月制年一圓二十錢 毎月制年貳圓

編輯兼發行人

山崎 辨 成

印刷人

東京市外西巢鴨町宮仲二七二二
原 子 廣 宣

發行所

東京市小石川區水道端三丁目四十四番
ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番